

「 函館山 」 ( 協同組合通信/井戸端論弾 ) 15.12.08

母校水産学部での特別講義が終わり、ほっとした思いで駅前から市電に乗った。十字街で降り、11時過ぎの閑静な青柳町をゆっくりと函館山の方へと向かった。商用看板などほとんど見当たらず、晩秋の坂道は時折雲間から陽光が射してきた。

31年振りの逍遙で、過ぎし日の色々な思い出が走馬灯のように浮かんできた。昔と少しも変わっていない格調高いハリストス正教会を眺め、学生時代にタイムスリップ。急峻な道を上り詰め、見返ると鈍く鉛色の函館湾の海が輝く。ふと目にした道標。函館山への旧山道の案内。三大夜景のダイヤモンドの光と漁り火が観光名物だが、今は寂寥とした臥牛山。

3日前の降雪で、登山バスは春まで運行休止。まばらな観光客を乗せたケーブルを横目に、はっきりと徒歩で登山の覚悟。函館山はその昔、陸とは繋がっていなかった。いわゆる陸繋島。現在の市街は砂州と河岸段丘に立地。冬鳥もいるらしいが鳴くのはカラス。東京のせわしいカラスと違って、鳴き声もカーと伸びやか。首都圏の嫌われ者とは段違い。

鈴を鳴らしながら下ってきた初老の紳士に出会い、短い会話を交わす。スーツ姿の登山者は初めてと妙に感心された。案内板に標高 332m とあるから、普通の足なら小 1 時間。白い息を吐きつつ、冬枯れの木立の中を行くと、澄み切った冷気と靈気が漂い、眼下の街での出来事が遠い昔のここのように思えるから不思議だ。

頂上には昼前に到着。後から登ってきた一組の母娘の会話は津軽弁。景色にピッタリ耳に心地よく、旅愁満喫。

頂上からは昼下がりの陽光で、黄金色に輝く津軽海峡と巴の港・函館湾と恵山に至る遠景が見事。しばし佇み、下北半島に目を凝らし閑中有情。北洋漁業の基地で栄えた大門、松風町の街並みも一変。青函連絡のターミナルを終え、函館駅も新装。

最後の北洋船団出港に託け飲んで騒いだ千畳敷を通り、七曲コースを熊笹の落ち葉を踏みしめ、立待岬へ出た。啄木一族の墓にお参りし、函館散策終了。

水産に学び、昨今の漁業の凋落に感慨深い。産官学や経済特区プロジェクトで戻って来たい心の故郷港町。

( 気象情報システム株式会社 高 津 敏 )